

## 大名による寺院の移転とその意義について

櫛田 尚人

### はじめに

岐阜県文化財保護センターでは、平成30年から令和4年までの5年間に「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」（以下、「総合調査」と記す。）を実施し、令和5年3月に報告書を刊行した。報告書総括では県内の古代・中世寺院の様相を概観し、歴史的な位置付けについてまとめ、その第3節「5地域有力者との関係」で、「岐阜城下に当たる金華地区には、戦国大名の指示によって寺院が移転、寺町が形成された」点について取り上げた<sup>1)</sup>。これは篠田壽夫氏が「岐阜市金華地区の寺院配置考」で岐阜城下における寺院の配置について詳細に分析されており<sup>2)</sup>、その研究成果を踏まえている。このような地域の支配者が寺院を移転させ寺町を形成する事例は、岐阜城下以外の県内各地でも確認できる。しかし、報告書作成の段階では岐阜城下以外の様相について集約できていなかった。そこで小稿では、同報告書の「寺院一覧表・参考寺院一覧表」等を手がかりに大名<sup>3)</sup>が主体となって移転している寺院を抽出し、寺院移転が行われている時期、地域、移転を主導した大名について集約、考察する。また、そこから読み取れる大名の意図や寺院機能について検討する。なお、関係する寺院の抽出や考察には各寺院に伝わる由緒を中心に行う。伝わっている情報がどこまで正確か判断することは難しく、その取扱いについては注意が必要である。しかし、由緒以外の資料だけでは情報量が少なく全体像を把握することは難しい。よって、小稿の課題を考えるうえで由緒を参考にすることは、必要不可欠であると考え、先行研究<sup>4)</sup>に倣い論を進める。

### 1 大名が主導する寺院移転の様相

#### (1) 寺院移転の時期と地域

岐阜県内における寺院移転の推移は総合調査の報告書（以下、「報告書」と記す。）の総括で記述しているとおり、「12世紀後半まで限られた数しか確認することができない。13世紀前半から15世紀前半までは一定数の移転を確認でき、15世紀後半に飛躍的に増加する。その後、17世紀後半まで移転数の多い状態が続く。」<sup>5)</sup> それらの寺院の移転理由については、由緒を確認しても不明な場合が多い。しかし、一部で大名等によって移転を強いられているケースがある。また、その移転先が城内や城下町であることを示すような記述も多く見つけることができる。そこで、移転の記録がある寺院のうち、移転に大名の意思が関わっていると思われる寺院を抽出し、移転の時期、移転を主導した大名、城や城下町形成との関りがあるかを確認した。その結果をまとめたものが表1である<sup>6)</sup>。そこからわかることについて順に説明する。

まず「移転時期」についてである。大名が主導する移転寺院が初めて確認できるのは15世紀で、その後増加し、17世紀前半にピークを迎える。17世紀後半からは減少していく（図1）。報告書でも触れたとおり、移転寺院全体の変化（図2）は、16世紀半ばから17世紀末までの150年間移転の多い状態が続いているので、移転数が増えたことと大名主導の移転が増えたことには別の理由があると考えられる<sup>7)</sup>。

表1 大名主導によって移転した寺院一覧(1)

報告書の 寺院番号	寺院名	移転時期	移転を主導 した大名	移転前の場所 (現市町村名)	移転前に関 連する城郭	移転先の場所 (現市町村名)	移転先に関 連する城郭
19049	円徳寺	1400年代半ばか	東常縁	郡上市	—	郡上市	—
14045	報恩寺	1500年代半ばか	生駒氏	可児市	—	可児市	—
03079	桂峯寺	1504～20年頃	江馬時直	高山市	—	高山市	—
01003	美江寺	1532～55年頃	齋藤道三	瑞穂市	—	岐阜市	稲葉山城
19036	安養寺	1539年	東元胤	郡上市	—	郡上市	—
19093	林廣院	1552年	遠藤盛数	郡上市	—	郡上市	鶴尾山城
20030	龍泉寺	1554年	三木良頼	下呂市	—	下呂市	桜洞城
02260	遮那院	1558～1570年頃	氏家直元	大垣市	—	大垣市	大垣城
01252	大宝寺	1562年	齋藤義龍	岐阜市	—	岐阜市	稲葉山城
02095	善念寺	1563年	氏家卜全	大垣市	—	大垣市	大垣城
01055	誓願寺	1567年	織田信長	愛知県清須市	清州城か	岐阜市	岐阜城
01061	誓安寺	1567年	織田信長	愛知県清須市	清州城か	岐阜市	岐阜城
01108	蓮生寺	1567年	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01118	円徳寺	1567年	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01057	大泉寺	1567年頃か	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01413	西野不動堂	1567年頃か	織田信長	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01308	法華寺	1576年	織田信長	愛知県清須市	—	岐阜市	岐阜城
01058	安楽寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01060	含政寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
01272	勝林寺	1578～92年頃	織田信長か	愛知県小牧市	小牧山城か	岐阜市	岐阜城
03011	大雄寺	1588年頃か	金森長近	高山市	—	高山市	高山城
19036	安養寺	1588年	稲葉貞通	郡上市	—	郡上市	郡上八幡城
03035	高山別院照蓮寺	1588年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
03036	照蓮寺	1588年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
02201	善教寺	1589年	羽柴秀勝	羽島市	—	大垣市	大垣城
01056	極楽寺	1592～1600年頃	織田秀信	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
34001	覺専寺	1592年	豊臣秀吉	坂祝町	猿啄城	坂祝町	猿啄城
03053	真蓮寺	1600年	金森長近	白川村	—	高山市	高山城
14065	妙願寺	1600年	森忠政	可児市	美濃金山城	長野県長野市	海津城
10005	浄光寺	1601年	松平家乗	群馬県伊勢崎市	那波城か	恵那市	岩村城
10034	盛巖寺	1601年	松平家乗	群馬県伊勢崎市	那波城か	恵那市	岩村城
07009	教泉寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07010	願念寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07008	来昌寺	1605年頃か	金森長近	美濃市	—	美濃市	小倉山城
07018	清泰寺	1605年	金森長近	美濃市	鉦尾山城	美濃市	小倉山城
21021	常楽寺	1605年	今尾城主	海津市	—	海津市	今尾城
02062	浄専寺	1609～1615年頃	石川忠總	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
01141	専長寺	1610年	加藤貞泰	岐阜市	—	岐阜市	黒野城
01372	正木御坊	1610年	加藤貞泰	岐阜市	—	岐阜市	黒野城
21082	慈眼寺	1611～1628年頃	徳永昌重	海津市	—	海津市	高須城
36017	妙雲寺	1611年	大島光政	川辺町	—	川辺町	—
01250	護国寺	1615年	徳川家康	岐阜市	—	岐阜市	岐阜城
09088	真福寺	1615年	徳川家康	羽島市	—	愛知県名古屋	名古屋城
02062	浄専寺	1624～1645年頃	岡部長盛	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02201	善教寺	1628年	岡部長盛	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
19091	慈恩寺	1631年	遠藤慶隆	郡上市	—	郡上市	郡上八幡城
02010	文殊寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02018	圓通寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02034	常楽寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02231	全昌寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02240	常隆寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02263	南光院	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02264	彌勒寺	1635年	戸田氏鉄	兵庫県尼崎市	尼崎城	大垣市	大垣城
02034	常楽寺	1638年	戸田氏鉄	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
10034	盛巖寺	1638年	松平家寿	恵那市	岩村城	浜松市	浜松城
10050	妙仙寺	1638年	丹羽氏信	愛知県日進市	岩崎城	恵那市	岩村城
01414	全久院	1639年	松平光重	兵庫県明石市	—	岐阜市	加納城
01416	彌勒院	1639年	松平光重	兵庫県明石市	—	岐阜市	加納城
17045	円城寺	1649年	金森重直	飛騨市	—	飛騨市	—

表1 大名主導によって移転した寺院一覧(2)

報告書の寺院番号	寺院名	移転時期	移転を主導した大名	移転前の場所(現市町村名)	移転前に関連する城郭	移転先の場所(現市町村名)	移転先に関連する城郭
02231	全昌寺	1651年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02062	浄専寺	1652～1655年頃	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02201	善教寺	1655年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
14006	無量寺	1659年	原氏	可児市	—	可児市	—
18068	智勝院	1661年	松平光重	本巣市	—	本巣市	—
02034	常楽寺	1662年	戸田氏信	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
02264	般若院彌勒寺	1672年	戸田氏西	大垣市	大垣城	大垣市	大垣城
08004	天猷寺	1680年	馬場利尚	瑞浪市	—	瑞浪市	—
10100	赤薬師	1686年	丹羽氏音	恵那市	—	恵那市	岩村城
02014	正覚院	1690年	高木新兵衛	大垣市(上石津)	—	大垣市(上石津)	—
10050	妙仙寺	1702年	丹羽氏音	恵那市	岩村城	新潟県妙高市	高柳陣屋
10050	乗政寺	1702年	松平乗紀	長野県小諸市	小諸城	恵那市	岩村城
10114	城内八幡宮(薬師寺)	1702年	松平乗紀	長野県小諸市	小諸城	恵那市	岩村城
01414	全久院	1711年	松平光熙	岐阜市	加納城	京都府京都市	淀城
01415	妙光寺	1711年	松平光熙	岐阜市	加納城	京都府京都市	淀城
01418	良善寺	1711年	安藤信友	群馬県高崎市	高崎城	岐阜市	加納城
02203	正林寺	1728年	高木貞輝	大垣市(上石津)	—	大垣市(上石津)	—

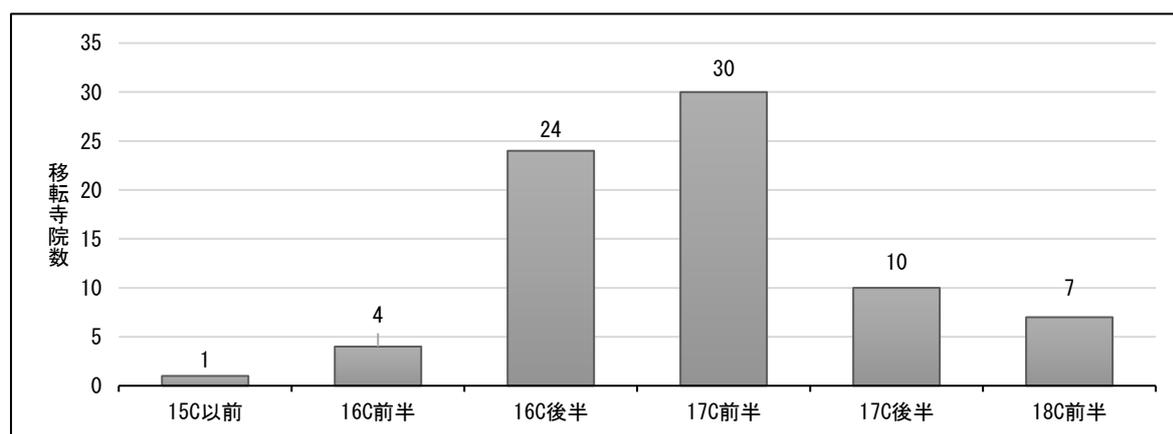


図1 時期別の大名主導による移転寺院数の変化

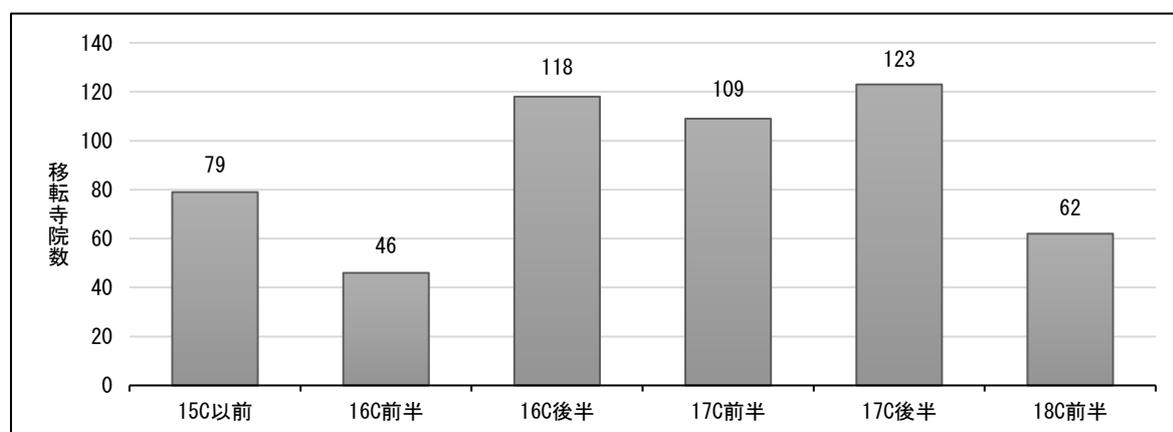


図2 時期別の移転寺院数の変化

次に「移転を主導した大名」を確認する。16世紀前半までは、2ヶ寺以上の寺院を移転させている大名を確認することはできない。16世紀後半になると、織田信長が岐阜城の周辺への寺院の移転を大規模に行っている。また16世紀末には、豊臣家に従った大名（稲葉貞通、金森長近、羽柴秀勝、織田秀信、石川忠総、森忠政等）が寺院を移転させている。17世紀以降は、一人の大名が複数の寺院を移転させるケースが増える。松平家乗、加藤貞泰、徳川家康、岡部長盛、戸田氏鉄、戸田氏信、丹羽氏音、松平乗紀、松平光熙等である。大名による寺院の移転と城との関わりについて確認できる一番古い事例は、16世紀前半の斎藤道三が稲葉山城の近くへ移転した美江寺（岐阜市）である。16世紀後半になると稲葉山城を改修し岐阜城へと作り替えた織田信長が積極的に城下への移転を行わせている。それ以降に寺院移転を主導している大名のほとんどが、寺院を城内や城下町への移転させていることを確認できる。

「移転前の場所」と「移転後の場所」の関係については、17世紀の初めぐらいまで城とは関係のない場所から移転させている場合が多いが、17世紀半ばごろからは他の地域の城や城下町にあった寺院が、別の城や城下町へ移転させられているケースが増えてくる。これは戸田氏鉄が尼崎城から大垣城へ移転させている文殊寺、圓通寺、常楽寺、全昌寺、常隆寺、南光院、彌勒寺、松平乗紀が小諸城から岩村城へ移転させている乗政寺、城内八幡宮（薬師寺）等が挙げられる。また、17世紀半ばごろから、同じ城下の中で何度も移転を繰り返させている場合もあり、特に大垣城下の寺院で多く確認できる。例えば、善教寺は天正17（1589）年に羽柴秀勝により羽栗郡竹ヶ鼻から城下の本町へ移され、寛永5（1628）年に岡部長盛により城下の竹島町に移され、明暦元（1655）年に戸田氏信により城下の寺内町に移されている。これ以外にも浄専寺や常楽寺、彌勒寺等が大垣城下の中で移転を繰り返している。

これら「移転時期」「移転を主導した大名」「移転の場所」の状況を集約した結果から推測されることは、近世城下町の整備と大名による寺院移転がリンクするという点である。岐阜において近世城下町の整備は、16世紀後半の織田信長岐阜城下町に始まり<sup>8)</sup>、16世紀末以降に飛騨国の高山城や美濃国の大垣城等各地で行われるようになっていく<sup>9)</sup>。それに合わせて大名主導の城下への寺院移転は増えていく。17世紀後半以降に大名主導の寺院移転が減ってくるのは、城下町の整備がほぼ完了したことによるものだと考えることができる。

表1を作成する過程で、寺院の移転に関して次のようなことも確認できた。大名が移転した場合におけるその城下の寺院の動態に注目すると3つのケース（Ⅰ～Ⅲ類）に分類することが可能である。Ⅰ類は大名が寺院を城下に移転させた後、その大名が他の城へ移った場合に寺院は移転しない場合である。このケースにあてはまるのは、織田信長の岐阜城下（岐阜市）の寺院、加藤貞泰の黒野城下（岐阜市）の寺院である。織田信長は永禄10（1567）年に尾張国（愛知県）小牧から美濃国（岐阜県）岐阜城（当初は稲葉山城）へと居城を移し、多くの寺院移転に関わっている。その後、永禄10（1567）年に近江国（滋賀県）安土城に居城を移しているが、岐阜城下の寺院が安土城下へ移されたという記録は確認できない。加藤貞泰は文禄3（1594）年に黒野城を築城し、城下に複数の寺院を移転させた。その後、慶長15（1610）年に伯耆国（鳥取県）米子へ転封となるが、黒野城下の寺院を米子へ移転させていない。Ⅱ類は、大名が寺院を城下に移転させるが、その大名が他の城へ移った場合に寺院も一緒に移転している場合がある。このケースにあてはまるのは、森氏的美濃金山城下（可児市）の寺院

や松平氏の加納城下（岐阜市）の寺院である。妙願寺（可児市）は、森可成が美濃金山城主になった時に建立された寺院である。息子の森忠政の時に信濃国（長野県）川中島、美作国（岡山県）津山へと転封を繰り返すが、妙願寺も大名と共に移転を繰り返した。全久院（岐阜市）は永正 11（1514）年に三河（愛知県）で建立された寺院であるが、寛永 16（1639）年に松平光重が岐阜市加納へ転封すると、全久院も加納に移転させられた。さらに正徳元（1711）年に松平光熙が山城（京都府）に転封となると、全久院も山城へ移転させられた。Ⅲ類は、大名が寺院を城下に移転させるが、その城主が他の城へ移った場合に寺院も一緒に移転させられ、かつ元々の城下にも同じ名前の寺院が残る場合である。これにあてはまるのは、岩村城下（恵那市）の盛巖寺（恵那市）がある。盛巖寺は松平家乗によって上州那波（群馬県）にて建立された寺院で、1601年に松平家乗が美濃国岩村に転封されると、盛巖寺も岩村城下に移転させられ、その後寛永 15（1638）年に松平乗寿が遠江国（静岡県）浜松に転封されると、盛巖寺も浜松に移転させられた。しかし、恵那市にも盛巖寺は残され現在まで続いている。Ⅰ類は 16 世紀後半から 17 世紀初めに多く確認できる。Ⅱ類は 17 世紀以降に出現してくる。Ⅲ類は事例が少ないので傾向を掴むのは難しい。

Ⅰ類からⅡ類への変化は、城下町の整備との関係に加えて大名と寺院との結びつきが 17 世紀以降にかなり強まっていったのではないかと推測できるが、具体的な変化の理由は不明である。

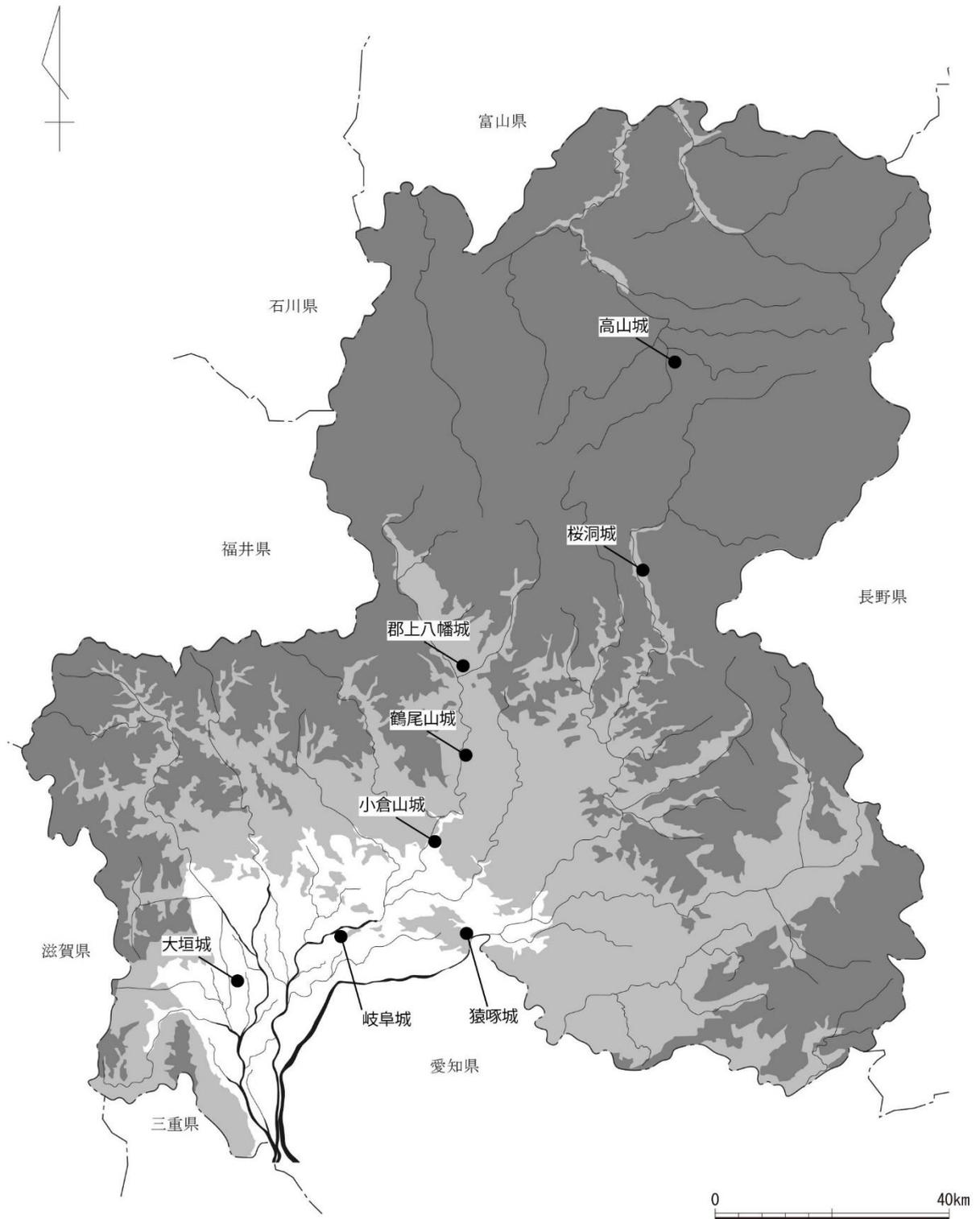
## （２）大名による寺院移転の分布

ここまでの分析により、大名による寺院の移転は城や城下町の整備との関係で行われることが多いことが判明した。そこで岐阜県内で寺院の移転（＝城下町の整備）が行われた場所を図 3・4 に図示した<sup>10)</sup>。

図 3 を見ると岐阜県南部の木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）流域の城で大名による寺院移転の記録が多く確認できるが、東濃ではほとんど確認することができない。図 3 は 16 世紀全体で括っているがもう少し細かい時期で考察すると、16 世紀後半に岐阜城を中心によく見られるようになり、16 世紀末に大垣城や郡上八幡城、高山城等の城下で寺院の移転が行われるようになる。これは先述のとおり織田信長が先陣を切って城下の整備をはじめ、その後確立する織豊政権の影響が美濃国、飛騨国の全体に広がっていったことによると考えられる。すなわち織豊政権配下の大名たちによって城下町の整備がなされるようになり、寺院もその影響で移転させられることになったということではないだろうか。なお、美濃国の中でも東濃は織田氏と武田氏の争いが天正 10 年（1582）年まで続き、その年に起こった本能寺の変等により支配が落ち着かなかったため、城下町の整備が遅れたのではないだろうか。

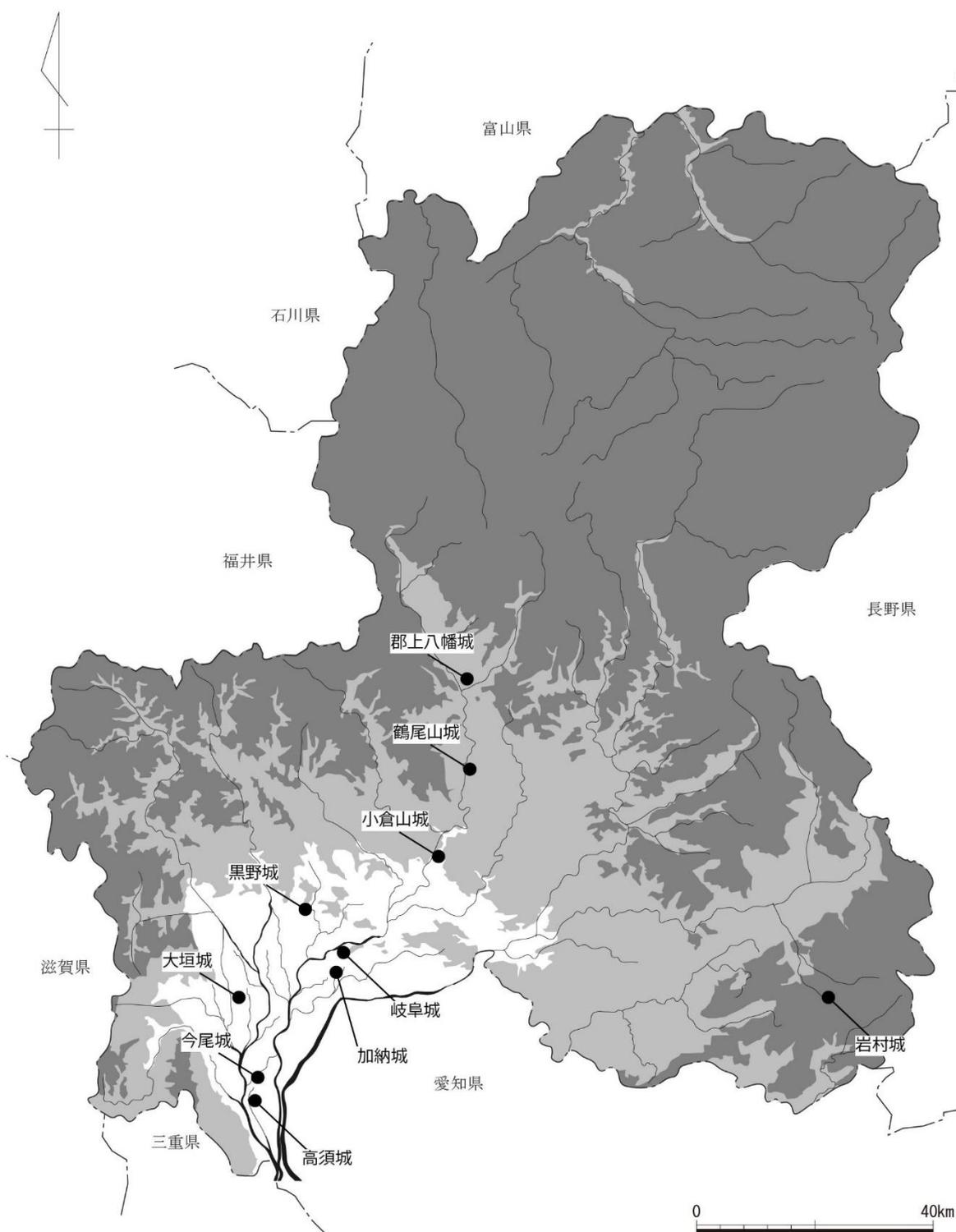
図 4 を見ると、17 世紀以降も美濃国、特に木曾三川流域では引き続き寺院の移転が積極的に行われ、東濃でも確認することができるようになる。特に大垣城では 16 世紀以上に多くの移転が確認できる。また、黒野城や加納城、岩村城等でも複数の寺院移転を確認できる。一方飛騨国では、この時期の移転は確認できなくなる。これは、美濃国が慶長 5（1600）年の関ヶ原合戦後に徳川氏によって頻繁に大名の転封が行われるようになった一方で（表 2）<sup>11)</sup>、飛騨国では豊臣政権から徳川政権に移行しても引き続き金森氏が支配を任されていたため、城下町の整備も一段落し、寺院の移転も少なくなったことを示していると考えられる。

一つ分からないのが苗木城（中津川市）での移転が確認できないことである。苗木城は遠山氏の支



※背景の地図（県域や県名等）は岐阜県文化財保護センター2023を使用

図3 16世紀に大名による寺院の移転があった城



※背景の地図（県域や県名等）は岐阜県文化財保護センター2023を使用

図4 17～18世紀に大名による寺院の移転があった城

表2 美濃・飛騨の大名変遷

	1600年		1700年		1800年	1869年
美濃	大垣藩	石川氏	松平氏	戸田氏		
	加納藩	奥平氏	戸田氏		安藤氏	永井氏
	高富藩	※高富藩は1705年に立藩			本庄氏	
	高須藩	徳永氏	小笠原氏		松平氏	
	郡上藩	遠藤氏			金森氏	青山氏
	岩村藩	松平氏	丹羽氏		松平氏	
	苗木藩	遠山氏				
飛騨	高山藩	金森氏		幕府直轄領		

※岐阜県 2001 を加工

配の元で城山の北麓に城下町が存在していたことが分かっている<sup>12)</sup>。また、苗木藩初代藩主の遠山友政は慶長19(1614)年に雲林寺を建立し仏教統制を行っている。にもかかわらず遠山氏による寺院移転の記録は確認できない。理由として、明治3(1870)年から4(1871)年にかけて行われた廃仏毀釈<sup>13)</sup>によって、そういった伝承や記録が残らなかった可能性もあるが詳細は不明である。

## 2 寺院を移転した理由

### (1) 先行研究

ここまで大名による寺院の移転が築城や城下町整備の中で行われてきたことを明らかにしてきた。では大名たちはどのような理由で寺院を城下町の中へ取り込み配置していったのだろうか。その理由を探るため、先行研究や他地域の研究を参考にそれが岐阜県内の事例でも当てはまるのか、また岐阜県独自の特徴があるのか考察する。

まず参考にしたいのは伊藤毅氏の研究である<sup>14)</sup>。伊藤氏は豊臣秀吉が京都の都市改造計画の中で、寺院を移転させ、寺町を形成させることによって中世的な寺院を近世の教団組織へと変化させていったと分析している。豊臣秀吉は天正14(1586)年に聚楽第の建設を開始し、その過程で大規模な寺院の移転を行わせている。伊藤氏はその目的として次の4つを挙げている。一つ目は防衛線の形成である。都で戦争が勃発した時に、敵が最初に僧侶や寺院に遭遇するように仕向けた。二つ目は町と寺院の分離である。僧侶たちは市内の街とあまりにも親密なので、その親密さを不快に思い人々に悪影響があると考えた。寺院と町の結びつきを分断しようとしたのである。三つ目は下京の再開発である。市内で大規模な敷地を占拠していた寺院の存在は新しい町割りをする上で邪魔だった。そのため、寺院を町外に移して新しい町割りを施行していったのである。四つ目は御土居の建設である。御土居とは洛中のまわりを取り囲む土塁のことである。御土居の東辺は鴨川に接する。河原の工事が難航すると考えた秀吉は、寺院建設のための敷地造成や土木工事を河原まで行い、御土居建設の下準備の一役を担わせたのである。伊藤氏は、このような寺町計画の中で、寺院が持っていた様々な既得権益<sup>15)</sup>

を取り去って機能分離された純粋な寺院を集合させていったのだとしている。

次に参考にしたいのは関戸明子氏・奥土居尚氏の研究<sup>16)</sup>である。両氏は「高崎城下町の形成過程と地域構成」の中で、高崎城下町における寺院の移転とその配置について考察している。高崎城の城下町は、慶長3（1598）年に井伊直政が箕輪から移転して城下町の造営に着手して以降、多くの大名が転封を繰り返す中で発達していった。井伊氏は高崎へ移転すると、以前に高崎を支配していた和田氏の時代からあった寺院を城郭外に分散し、箕輪から14寺院を移転させている。その中でかつての箕輪城主である長野氏が城の鬼門除け<sup>17)</sup>として建立した石上寺を高崎城の鬼門にあたる北東の地へ移転させ、代々の城主の祈願所としている。また、その他の大寺院を城下の外縁部、街道の出入口など軍事上の重要な場所に計画的に配置している。箕輪で井伊氏の菩提寺であった安国寺は大手門を正面から守る位置に置かれている。さらに、寺院は領主や家臣、領民の精神的紐帯、武士の集結地、火除け地、町人の避難地などの機能を担うことになった。このように、高崎城下町でも大名の都市計画にあわせて寺院を移転させ、様々な機能を担わせていたと説明されている。

## （2）県内寺院の移転理由

では、これらの研究で示されているような寺院移転の理由が県内の寺院に当てはまるのだろうか。それを明らかにするため、寺院移転の理由や寺院の役割が由緒から読み取れる寺院を抽出し、まとめたのが表3である<sup>18)</sup>。それらを豊臣秀吉の京都整備や高崎城下の整備と比較すると多くの共通点を見つけることができた。それらは次のように分類することができる。A類：戦時の防衛拠点として役割、B類：鬼門除け（仏教の霊的な力によって城や城下町、一族を守る）、C類：都市を統治していくうえで必要な様々な任務の遂行、D類：大名にとって脅威となるような寺院と民衆との関係を分断すること（寺院勢力の抑圧）、E類：新しい都市整備に必要な土地の確保、である。A類～C類とD類・E類では内容が異なり、前者は大名が寺院を城下に配置する理由、後者は寺院を立ち退かせる理由である。では、岐阜県内における具体的な事例を挙げる。

A類については岐阜城下の誓願寺の由緒に次のような記述がある。

「永禄12（1569）年織田信長は尾張の清州にあった当地五世岩空上人に帰依し、岐阜に移した。それは現在地ではなく、当時の今泉町（現在の常磐町、上竹屋町、泉町付近）に数町歩の土地を与え、長良川から用水路を造って水を引き、堀をめぐるして門中に数棟の堂宇を建立し、外敵に備える出城の形の大寺院を造った。」<sup>19)</sup>

織田信長が出城として大寺院を利用するため、寺院を移転させたという記述である。岐阜県内の寺院の由緒で寺院を城の防衛拠点にするという手法が確認できるのはこの事例だけであるが、同様の機能を求めていると考えられる寺院としては、美濃金山城下の可成寺旧境内がある。可成寺は大堀切の南東側にあったという伝承地があり<sup>20)</sup>、現地には平坦面が残っており、城との位置関係から、これも曲輪としての機能をもっていた可能性がある。

B類については、小倉山城下の来昌寺の由緒に次のような記述がある。

「慶長年間金森長近の新城下町造りの際、鬼門徐として現在地に移され、清光山浄円寺と称した。」<sup>21)</sup>

まさに「鬼門除け」のために移転された寺院であったことがわかる。ただ、鬼門除けについては移転ではなく城下に新しく建立されることの方が多い。具体的に例を挙げると美濃金山城下の神照寺、黒野城下の薬師寺、猿啄城下の學専寺等である。城や城下町整備の中で、移転させる寺院と建立する

表3 大名による移転の意図がわかる寺院

報告書の寺院番号	寺院名	移動時期	移転した大名	移転先に関連する城郭	由緒に残る移転の理由、目的 (A～Eは分類、文中参照)
01003	美江寺	1532年 ～1555年頃	齋藤道三	稲葉山城	稲葉山城を築いた際、現地に移転し、城下の繁栄を守護させた。(B)
01055	誓願寺	1567年	織田信長	岐阜城	堀をめぐらして門中に数棟の堂宇を建立し、出城形の大寺院であった。(A)
01058	安楽寺	1576年頃か	織田信忠	岐阜城	戦乱の中で志半ばで戦死した者たちを弔うのにふさわしい地として浄土宗寺院を岐阜善光寺の門前に集めた。(B)
01141	専長寺	1610年	加藤貞泰	黒野城	城下町の繁昌のため移転を請われ、黒野別院南に移転。(C)
01372	正木御坊	1610年	加藤貞泰	黒野城	大洪水により正木別院が水害を受けたことが原因の一つとも云われ、黒野城下繁栄のためともいわれる。(C)
01413	西野不動堂	1567年頃か	織田信長	岐阜城	岐阜町を守るため、城下町四方に伊奈波善光寺、小熊の地藏、西野の不動、美江寺の観音を四天王とした。(B)
02095	善念寺	1563年	氏家ト全	大垣城	郭内の要地であるとされ、寺の場所を召上げられ、竹島町西端へ移転した。(E)
02201	善教寺	1628年	岡部長盛	大垣城	用地として寺地を召上げられ、竹島町に移り本堂を造営する。(E)
07008	来昌寺	1596年 ～1615年	金森長近	小倉山城	町づくりの際に、鬼門除けとして現在地へ移され、本堂に数多の鬼の瓦が使用される。(B)
10100	赤薬師	1686年	丹羽氏音	岩村城	城下町乃び城の守護の意味があり、明治維新まで存続。(B)
19036	安養寺	1588年	稲葉貞通	郡上八幡城	大島安養寺の勢力が強大なのを憂慮して、寺を城下に近い小駄良に移させた。(D)

寺院の使い分けがあった可能性がある。また岐阜城下の安楽寺の沿革に次のような記述がある。

「織田信忠公が戦乱の中で志半ばで戦死した者たちを弔うのにふさわしい地として浄土宗寺院を岐阜善光寺の門前に集めた。伊奈波神八ヶ寺の一つである。」<sup>22)</sup>

この善光寺門前に集められた寺院について、篠田氏は「因幡神社の社頭に愛宕社や善光寺を勧請し、因幡山を天下人の居城とするに相応しい、鎮護の霊域を創出しようとした。」<sup>23)</sup>と述べている。これは鬼門除けとは違うが、仏教の霊的な力によって城や城下町を守護するという意味ではBに分類できるのではないだろうか。

C類については、岐阜市黒野城下の寺院がある。黒野城下の正木御坊、専長寺は「城下繁昌」のために加藤貞泰によって移転させたとされている<sup>24)</sup>。加藤貞泰は城下町で楽市政策に尽力した人物なので、寺院を城下町に取り込むことによってそこに人々が集まり、経済の発展につなげようとしたと推測する。ただし、C類について、高崎城下では火除け地や避難場所のような様々な機能を担わせているとしているが、岐阜県内の寺院の由緒からはこのような内容を確認することはできなかった。

D類については、郡上市安養寺がある。安養寺が郡上八幡城下へ移転した経緯については白鳥町史で次のように説明されている。

「安養寺はこのように強大な勢力をもっていたので、東氏も遠藤氏も心を遣い、婚姻関係を結んで

親しく交っていた。稲葉貞通が封を本郡に受けると、深く安養寺の威勢をはばかって、城を鎮護するとの名目で、寺を八幡城下へ移そうとした。」<sup>25)</sup>

安養寺は浄土真宗の寺院で、信徒への影響力が強だけでなく、甲斐の武田氏や越前の朝倉氏など群雄の間に立って奔走していた。そのため稲葉貞通は安養寺が領国支配の中で脅威であると考え、自分の支配下に置こうとしていたことが推測される。豊臣秀吉が京都において町と寺院の関係を断つために郊外へと移転した事例とは逆のようにも見えるが、寺院勢力の抑圧という意味では同類ではないかと考えた。

E類については、大垣城下の善念寺がある。同寺院の由緒に次のような記述がある。

「永禄6（1563）年に氏家ト全入城の際、郭内要地たるに依り、寺地を召上げられ、竹島町西端へ移転」<sup>26)</sup>

また、同じく大垣城下の善教寺の由緒にも次のような記述がある。

「寛永5（1628）年城主岡部内膳正より用地として寺地召上げられ、5世光月院善教竹嶋町へ移り本堂を造営す。」<sup>27)</sup>

これらは、大名が築城や城の改修、城下町の整備をしていく中で、寺院の敷地を取り上げ、代わりに他の土地を与えて移転させるという事例と考えられる。豊臣秀吉が敷地の確保のため寺院を移転させたのと同様に、また、井伊直政が和田氏の時代からあった寺院を城外に分散させたのと同様に大名にとって邪魔な寺院は別の場所に移転させられていったと推定される。

このように、大名たちは城及び城下町の整備の都合に合わせて寺院を移転させていたことが分かる。そして、これは中世の大名と寺院との関係は違って、近世の大名が寺院を支配下に置けるようになったことを示していると思われる。

### （3）移転と宗派の関係

大名による寺院の移転について、宗派によってその扱いは違うのだろうか。先述の伊藤氏の研究によると、秀吉による京都都市改造計画における移転ではすべての寺院で行われたわけではなく、ほとんどは浄土宗、日蓮宗、時宗の寺院であったとされる<sup>28)</sup>。岐阜県内の寺院移転においても、宗派を意識して大名が寺院を移転させていることへの指摘はいくつかある。県内寺院の移転理由でも述べた善光寺門前の寺院について、篠田氏は浄土宗の寺院を集めていることを指摘されている。また、由浅耕三氏の研究<sup>29)</sup>によると、大垣城下では本道沿いを中心とする部分に「真宗」が多く、侍屋敷の近くに「浄土宗」、城下町周辺部に「臨済宗」「曹洞宗」、町屋敷の周辺部に「日蓮宗」が多いといった指摘をされている。そこで表1で取り上げた寺院についてその宗派を確認してみると真宗や浄土宗が多いことがわかる（表4）。ただし、これは大名の意図というより岐阜県内において他の宗派に比べて真宗の寺院が多い<sup>30)</sup>ため移転数も真宗が多くなっている可能性がある。また報告書でも指摘しているが、地域によって信仰する宗派は大きく異なる。そのため、県内全ての城で共通するような傾向を見出すことはできない。宗派と寺院移転の関係については、それぞれの城ごとや大名ごとに相関関係を調べる必要があると考えられ、今後の課題としたい。

### おわりに

小稿では岐阜県内における大名主導の寺院の移転について、時期や地域、移転を主導した大名、城

表4 大名主導の寺院移転と宗派

報告書の 寺院番号	寺院名	宗派	移転を主 導した大 名	移転前に関 連する城郭	移転前に関 連する城郭
01003	美江寺	天台宗	齋藤道三	—	稲葉山城
01252	大宝寺	臨濟宗	齋藤義龍	—	稲葉山城
01055	誓願寺	浄土宗	織田信長	清州城か	岐阜城
01056	極楽寺	浄土宗	織田秀信	—	岐阜城
01057	大泉寺	浄土宗	織田信長	—	岐阜城
01058	安楽寺	浄土宗	織田信忠	—	岐阜城
01060	含政寺	浄土宗	織田信忠	—	岐阜城
01061	誓安寺	浄土宗	織田信長	清州城か	岐阜城
01108	蓮生寺	真宗	織田信長	—	岐阜城
01118	円徳寺	真宗	織田信長	—	岐阜城
01272	勝林寺	曹洞宗	織田信長	—	岐阜城
01308	法華寺	日蓮宗	織田信長	—	岐阜城
01250	護国寺	臨濟宗	徳川家康	—	岐阜城
01413	西野不動堂	—	織田信長	—	岐阜城
01418	良善寺	浄土宗	安藤信友	高崎城	加納城
01416	彌勒院	真言宗	松平光重	—	加納城
01414	全久院	曹洞宗	松平光重	—	加納城
01141	専長寺	真宗	加藤貞泰	—	黒野城
01372	正木御坊	真宗	加藤貞泰	—	黒野城
10005	浄光寺	真宗	松平家乗	那波城か	岩村城
10034	盛巖寺	曹洞宗	松平家乗	那波城か	岩村城
10050	妙仙寺	曹洞宗	丹羽氏信	岩崎城	岩村城
10050	乗政寺	—	松平乗紀	小諸城	岩村城
10100	赤薬師	—	丹羽氏音	—	岩村城
10114	城内八幡宮 (薬師寺)	—	松平乗紀	小諸城	岩村城
02018	圓通寺	浄土宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02034	常楽寺	浄土宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
			戸田氏鉄	大垣城	大垣城
			戸田氏信	大垣城	大垣城
02010	文殊寺	真言宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02260	遮那院	真言宗	氏家直元	—	大垣城
02263	南光院	真言宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02264	彌勒寺	真言宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
02264	般若院彌勒寺	真言宗	戸田氏西	大垣城	大垣城
			石川忠總	大垣城	大垣城
02062	浄専寺	真宗	岡部長盛	大垣城	大垣城
			戸田氏信	大垣城	大垣城
02095	善念寺	真宗	氏家ト全	—	大垣城
02201	善教寺	真宗	羽柴秀勝	—	大垣城
			岡部長盛	大垣城	大垣城
			戸田氏信	大垣城	大垣城
02231	全昌寺	曹洞宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
			戸田氏信	大垣城	大垣城
02240	常隆寺	日蓮宗	戸田氏鉄	尼崎城	大垣城
07008	来昌寺	浄土宗	金森長近	—	小倉山城
07018	清泰寺	臨濟宗	金森長近	鉦尾山城	小倉山城
19036	安養寺	真宗	稲葉貞通	—	郡上八幡城
19091	慈恩寺	臨濟宗	遠藤慶隆	—	郡上八幡城
21082	慈眼寺	浄土宗	徳永昌重	—	高須城
03035	照蓮寺	真宗	金森長近	—	高山城
09088	真福寺	真言宗	徳川家康	—	名古屋城
10034	盛巖寺	曹洞宗	松平家寿	岩村城	浜松城
01414	全久院	曹洞宗	松平光熙	加納城	淀城
01415	妙光寺	日蓮宗	松平光熙	加納城	淀城
34001	覺専寺	真宗	豊臣秀吉	猿啄城	猿啄城
14065	妙願寺	—	森忠政	美濃金山城	海津城
10050	妙仙寺	—	丹羽氏音	岩村城	高柳陣屋
21021	常栄寺	日蓮宗	今尾城宗	—	今尾城
20030	龍泉寺	臨濟宗	三木良頼	—	桜洞城
19093	林廣院	曹洞宗	遠藤盛数	—	鶴尾山城

郭との関連性について考察した。時期については16世紀後半から大名主導の寺院移転が増え、17世紀前半にピークを向かえ、17世紀後半以降には減少していくことがわかった。地域については、16世紀に美濃国の木曾三川流域や飛騨国で確認できるが、17世紀以降は飛騨国ではほとんど確認できなくなるのに対し、美濃国では増加していく。移転を主導した人物については、16世紀後半に織田信長が多くの寺院を移転させ、16世紀末には豊臣配下の大名が寺院移転に関わるようになる。17世紀になると江戸幕府の政策によって転封された大名たちによって寺院移転が行われるようになる。これらの移転は齋藤道三・織田信長以降、ほとんどの場合において城との関わりを示す記述が確認できる。すなわち、大名による寺院の移転は城や城下町の整備との関係を示している。そこで、残っている由緒をさらに考察し、大名が寺院の移転を行うときの特徴や移転を行った理由について探った。そこで由緒等の資料から読み取れたことは、大名たちが寺院に対して防衛機能、城や城下町の守護、城下町経営における世俗的な役割などを求めていたということである。一方で、寺院が民衆と強い繋がりをもつことを忌避し、都市計画に邪魔な寺院はその敷地を取り上げるといった行動も行っている。

これらのことを踏まえると、大名は16世紀から17世紀にかけての政治状況の変化にあわせて寺院に対する支配力を強めていったことが推測される。15世紀以前の寺院は政治権力の影響を受けつつも独立した存在であり、地域の民衆に対しては領主的な立場にあった<sup>31)</sup>。それが、

戦乱で荒廃したり、太閤検地などの政策によって中世的な支配体制が崩壊したりする中で、その独自性を喪失し、寺院は大名の統制下に入り、大名に命令されるままに移転を繰り返していくことになったのではないだろうか。

ただし今回の小稿では、今後の寺院と大名、寺院と城との関係について考えなければならない課題を多くあることを示したと言える。例えば、城主の移転と寺院の移転の関係について、大名が移転する場合に城下に残る場合と大名と共に移転する場合があるが、この違いにはどのような意味があるのか、大名にとって城下町の整備の中で様々な機能、役割を寺院に求め寺院配置をしていることはある程度見えてきたが、どのような機能の時に城下町のどの位置に寺院を置いているのか、といった課題が見えてくる。宗派と寺院移転、寺院配置の関係についても検討が必要である。

このような課題を解決していくためには、研究の方法についても見直さなければならない。小稿では自治体史に記述された寺院の由緒をメインの資料として論を展開しており、本来は一次史料に遡ってデータを収集するべきであった。そのことにより大名の主導によって移転させられた寺院を網羅することは、おそらくできていない。また、寺院が移転された場所や位置については考古学的な検証<sup>32)</sup>や絵図等を用いた歴史地理学的な視点<sup>33)</sup>による分析もできなかった。そのためには、個別の城、城下町ごとに詳しく丁寧に資料を収集し考察する必要がある。個別の地域で検証することができれば、宗派と移転の関係等ももっと明らかになってくるだろう。さらに、今回は大名による寺院の移転という視点から城との関係等を見てきたが、大名による寺院の建立という視点も重要である。城や城下町の整備の中で、大名によって新しく建立された寺院も多くある。移転された寺院と建立された寺院の間にはどのような違いがあるのか、その検証も必要である。城や城下町の整備以前から存在しながら、移転していない寺院についても調べることができていない。寺院の移転を行っていない大名も存在するわけだが、これについてもデータの集約はできていない<sup>34)</sup>。これらの多くの視点から見直すことによって中世から近世に移り変わる時代の中で寺院がどのように変化していったのか、違った姿が見えてくるのではないかと考えている。

## 注

- 1) 文化財保護センター2023 第6分冊 p 86
- 2) 篠田 2015p21-45
- 3) 国史大辞典(吉川弘文館 1993)によると、大名とは古くは名田を持った者をさし、鎌倉時代には有力な武士をあらわす言葉になった。その後も様々な意味で使われるが明確な定義はない。小稿では大きな所領をもって家臣団を形成した有力武士の事をさす。
- 4) 内堀 2021 や篠田 2015 でも由緒を根拠とした研究を展開している。
- 5) 文化財保護センター2023 第6分冊 p 72
- 6) 寺院を移転時期の順に並べているので複数移転している寺院については、複数回表に出てくる。移転前の場所及び移転先の場所については現在の市町村名(岐阜県外の場合は都道府県名を含む)になっている。関連する城については「〇〇によって移転、〇〇城築城時に移転、〇〇から寺領を拝領」等の表現が由緒に含まれるものを抽出した。また、「高山市照蓮寺と一緒に移転」というように間接的に大名による移転が読み取れる寺院も対象に含めた。
- 7) 図1は複数回移転している場合、それぞれカウントしているのに対し、図2は総合調査報告書第6分冊 p90「表19 時期別の成立等」を参考に作成しており、複数回移転している場合は、最初の移転のみカウントしている。比較には注意が必要で

あるが、その誤差を踏まえても移転のピークが違うということは明らかである。

- 8) 岐阜県 2001 p 236～237
- 9) 岐阜県 2001 p 270～271、276～277
- 10) 図 3・4 の背景の地図（県域や県名等）は岐阜県文化財保護センター2023 第 6 分冊 p 92～p 94 の図 41～図 43 を使用した。
- 11) 表 2 は岐阜県 2001 「わかりやすい岐阜県史」 p 249 の「国内藩・幕府領の変遷」を参考に作成
- 12) 樋口好古 1989 『濃州徇行記』 p 147 に苗木城の城下町についての記述がある。
- 13) 中津川市 1988 中巻 2 - 2p1717
- 14) 伊藤 2003 p 29-46
- 15) 伊藤氏は豊臣秀吉の検地政策等により中世の寺院がもっていた検断権や下地進止権などに代表される領主権が否定されたとしている。
- 16) 関戸明子・奥土居尚 1996p1～20
- 17) 鬼門とは陰陽道で良すなわち東北の隅に当たる方角を言い、諸事について忌むべき方角とされている。そのためわが国では古来鬼門除けとして神仏を祀ることが広く行われてきた。
- 18) 寺院建立の目的として由緒に書かれている内容としては、菩提を弔うためという記述が最も多い。これは中世以降の寺院において大名による移転や城下町の整備とは関係なく存在する。もちろん時期や地域によって様相の違いはあると考えられるが、これは別稿が必要と考え今回は考察の対象から外した。
- 19) 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009p144
- 20) 文化財保護センター2023 第 3 分冊 p 86
- 21) 美濃市 1980p230
- 22) 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009p142
- 23) 篠田 2015p25
- 24) 黒野史誌編集委員会 1987p1293-1294
- 25) 白鳥町教育委員会 1976p224
- 26) 大垣市 1930p180
- 27) 大垣市 1930p202-203
- 28) 伊藤 2003 p 33
- 29) 由浅 1999p118
- 30) 岐阜県史（岐阜県 1972 p 939）「第 203 表 近世美濃国の宗派別および郡別寺院数」によると、禅宗 787 寺、浄土宗 117 寺、真宗 907 寺、時宗 3 寺、日蓮宗 39 寺、天台宗 38 寺、真言宗 76 寺で真宗が一番多い。また飛騨国に関しては具体的な寺院数を把握できていないが、わかりやすい岐阜県史（岐阜県 2001 p 350）に「西濃・郡上・飛騨の真宗、中濃・東濃の禅宗」とあるように、真宗が多いことが指摘されている。
- 31) 中世の仏教教団は単なる宗教集団ではなく、強大な政治勢力でもあった。それが織田信長による比叡山の焼き打ち、石山戦争、一向一揆制圧など、中世的仏教教団解体を経て、豊臣秀吉による比叡山の復興、本願寺との協調、方広寺・大仏殿建立などが行われ、仏教教団の再編成が進められた。中世的仏教教団の解体と再編成が織豊政権によって行われたことにより、江戸時代の寺院統制の前提条件が整えられた。（末木 2010p284）
- 32) 例えば内堀氏は大垣城下の遮那院と徳秀寺について、発掘調査の結果から 16 世紀後葉に遮那院が移転し、その跡地に徳秀寺が建設され、17 世紀初頭に徳秀寺が移転し、曲輪の再整備がなされたのではないかと推測されている。こういった検証が他の寺院についても必要である。（内堀 2021p158-159）

- 33) 例えば関戸明子・奥土居尚 1996 では絵図を用いた考察を行っている。
- 34) 寺院の移転を行っていない大名の代表例としては土岐氏が挙げられる。例えば内堀氏は「守護に関連する寺院は守護所の移転に伴って移転しない。寺院を伴って移転するのではなく、すでに寺院の存在する場所に居館と周辺の屋敷地が新設される」と指摘されている。(内堀 2021 p.105)

#### 参考文献

- 伊藤毅 2003 『都市の空間史』 吉川弘文館
- 糸貫町 1982 『糸貫町史通史編』
- 内堀信雄 2021 『戦国美濃の城と都市』 高志書院
- 恵那市教育委員会 2013 『岩村城跡基礎調査報告書 2』
- 大垣市 1930 『大垣市史 中巻』
- 大垣市 1968 『新修大垣市史 通史編一』
- 太田成和編 1954 『加納町史 下巻』
- 太田成和 1987 『郡上八幡町史 下巻』
- 可児町 1980 『可児町史 通史編』
- 兼山町史編纂委員会 1972 『兼山町史』
- 上石津町役場 1979 『上石津町史 通史編』
- 上石津町教育委員会 2004 『新修 上石津町史』
- 上宝村 2005 『上宝村史 下巻』
- 川辺町史編纂室 1996 『川辺町史 通史編』
- 岐阜県 1972 『岐阜県史 通史編 近世下』
- 岐阜県 2001 『わかりやすい岐阜県史』
- 岐阜県岩村町役場 1956 『岩村町史 全』
- 岐阜県海津郡南濃町 1982 『南濃町史 通史編』
- 岐阜県海津郡平田町役場 1964 『平田町史 下巻』
- 岐阜県地方改良協会養老郡支会 1970 『養老郡志』、岐阜日日新聞社・県郷土資料刊行会
- 岐阜県文化財保護センター2023 『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査』
- 岐阜市 1980 『岐阜市史 通史編 原始・古代・中世』
- 岐阜市 1981 『岐阜市史 通史編 近世』
- 黒野史誌編集委員会 1987 『岐阜市黒野史誌』
- 桑原町誌編集委員会 1994 『桑原町誌』、桑原町誌刊行実行委員会
- 国史大辞典編集委員会 1993 『国史大辞典』 吉川弘文館
- 坂祝町教育委員会町史編纂事務局 2005 『坂祝町史 通史編』
- 市制五十年記念誌編纂委員会 2004 『羽島市制五十年史』、吉田三郎
- 篠田壽夫 2015 「岐阜市金華地区の寺院配置考」『岐阜史学』104
- 清水進 2012 『大垣城の歴史』 大垣市文化財保護協会
- 白川村教育委員会 2004 『白川郷ゆかりの寺院』
- 白鳥町教育委員会 1976 『白鳥町史 通史編 上巻』

- 末木文美士 2010 『新アジア仏教史 1 3 日本Ⅲ民衆仏教の定着』 佼成出版社
- 関戸明子・奥土居尚 1996 「高崎城下町の形成過程と地域構成」『歴史地理学』 180
- 高田裕治郎 『現在の太垣市誌』 中央新聞社
- 高山市 1953 『高山市史 下巻』
- 特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館 2009 『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』
- 中津川市 1988 『中津川市史中巻Ⅱ』
- 萩原町史編纂室 2002 『萩原町史第 1 巻・自然先史中世古代編』
- 樋口好古 1989 『濃州徇行記』 大衆書房
- 飛騨市教育委員会 2008 『神岡町史 通史編Ⅱ』
- 美並村教育委員会 1981 『美並村史 通史編 上巻』
- 美濃市 1979 『美濃市史 通史編 上巻』
- 美濃市 1980 『美濃市史 通史編 下巻』
- 由浅耕三 1999 「大垣の城と城下町施設の配置形態に関する考察」『第 17 回地域施設計画研究シンポジウム』 日本建築学会